

～あした、転機になあれ！～

美し島哲楽さびら。



紀々（きき）

哲學家。那覇市出身。1998年に早稲田大学第一文学部哲学科東洋哲学専修を卒業。「自ら考え、自ら動く力を磨く社員研修を」との依頼を受け、「哲楽のチカラを、笑顔のチカラに」をテーマに、さまざまな企業現場でサポートを行っている。特に「若手リーダー・女性スタッフがイキイキ元気に働ける職場づくり」を哲楽する研修は、好評。現在は、沖縄の表現で「Let's 哲楽」を意味する「哲楽さびら。」を合言葉に、沖縄発で職場に哲楽習慣・風土を広めるべく活動を展開中。

職場を元気にする哲楽レシビ その二十一

「そもそも」「こそが、哲楽だ！」

やる気が起きないのは不安があるから

「研修が多すぎる」「なぜ、この作業が必要なの？」「何のための会議なの？。メールで十分なのに」。現場で働く人たちの間には、疑問や不安不満がいろいろあります。

それは学校でも同様で、「あの先生は、なぜ、こんなに厳しくて恐いの？」「なぜ、こんなに宿題があるの？」と、学生の皆さんからはたくさん疑問や不満の声を耳にします。

一方、職場の上司や学校の先生からよくリクエストされるのは、逆に「うちのスタッフ（または学生）のモチベーションをもっと上げてほしい」というもの。このような話をすると、若い人にはやる気や根性が足りないのかと思われがちですが…。

実は、よく話を聞いてみると、やる気や根性、モチベーションの不足が原因ではないことがほとんどであることが見えてきました。「そもそも、なぜ、それをしなければいけないのか？」ということが、相手に理解されていないだけなのです。

そんな「そもそも」の不透明感が、現場で働く人たちや、学生の皆さんのブレーキになっていることがとても多くて、本当にビックリ！

「なぜ、そのとおりになければいけないのか」「それを達成すると

その先には何が待っているのか」が明確でないということは、自分がどこに向かっているのか、わからないまま進めということです。それでは言われた方は、見知らぬところへ連れ去られるような不安を感じてしまうのではないのでしょうか。

つまり、部下や学生の皆さんのモチベーションが上がらないのは、不安があるから。原因は、そんな意外なところにありました。

そんなときにONになっているのは、「やらされ」スイッチ。「やれ！」の号令のもとで、納得しないまま、動き出しても、スピードや持続性はいまひとつのはず。ところが、「そもそも」に共感できる、あるいは納得できると、頭の中から「？」が消えるので、スイスイ進んでいけるのです！

「そもそも」の認識で変わる職場の雰囲気

「そもそも」を伝えること。「そもそも」を聞くこと。互いに「そもそも」を考えること。すべては「なぜ、それをする必要があるのか、大切なのか」という共通認識が、スタートには重要ではないでしょうか。

例えば、「ウチの売り場の接客は、なんだか元気がないんだよね」という相談を受け、現場の皆さんの声を

聞かせてもらったときのこと。思いがけない質問がありました。

「そもそも、元気ってどういうことですか？ 居酒屋みたいに声が大きければいいんですか？ それって、うちの店の雰囲気に合わない気がします。だから、落ち着いた雰囲気です。声をしているつもりなのですが、大きな声の方がいいのでしょうか？」

実は、深く考える人ほど、「そもそも」の根っこがハッキリしないと動きにくいようです。私も、その一人。高校3年生の、周囲が受験に向けてまっしぐらという時期には、大学受験の目的がわからなくなつて、立ち止まつてしまったことがありました。

まわりの友達はみんな、「どうしたら志望校に合格するのか」を必死で考えている中、私は「なぜ、大学に行くのか」を考えてしまったのです。そんな私の悩みに対して、友達からも大人からも、返ってきたのはほぼ同じ答えでした。

「高3にもなつて、そんなこと言っている場合じゃないでしょ！」

残念ながら、この答えは私の納得スイッチを押してくれませんでした。スイッチをONにしてくれたのは、「大学を卒業した人に、行つて良かったかどうか、聞いてみたら？」という、ある人からのアドバイス。そのインタビューの結果、多くの人が「大学に行つて良かった」とい

う話を聞くことができました。

大学で学んだ知識は直接、社会人生活に役立たなくても、4年間という自由な時間や、その間のさまざまな出会いはその後の人生に大きく役立つている、と。

「そもそも」という根っこにこだわることの大切さを学んだ出来事でした。「そもそも」は哲楽の原点なのです。

あした……転機に、なあれ！

その問題... そもそも何の問題？